Actions
アクションズ
若手医師活動報告

医学・生理学クイズ日本大会の引率から得た経験
～学生と共に向上する、あたらしい医学教育の模索～

札幌医科大学医学部 生理学講座細胞生理学分野 准教授
佐藤（さとう） 達也（たつや）

札幌医科大学の佐藤達也と申します。これまで循環器・腎臓・代謝内分泌疾患の診療に携わるなかで、病気の背景にある生命現象の「機序」と「なぜ」を知りたいという思いから、現在は生理学講座という基礎講座に籍を置き、教育と研究に精力的に取り組んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

私は札幌医科大学医学部の生理学の教員として、医学教育に携わっています。ミトコンドリア機能解析や心血管代謝制御に関する基礎研究、臓器連関をテーマとした橋渡し研究に加え、循環器・腎臓・代謝内分泌疾患の診療に従事している立場を活かし、自分の強みを活かせる医学教育・社会貢献の形を模索してまいりました。本稿では、その中で取り組んできた医学・生理学クイズ日本大会の学生引率の経験と、そこから得られた私見を記します。

【医学教育という未来への投資～医学・生理学クイズ日本大会の学生引率を経験して】

医学教育は、単に知識や技術を伝達する行為ではなく、次世代を担う医師・研究者を育てる「未来への投資」であると感じています。講義では、教科書的な内容にとどまらず、未解決課題への「問い」を重視し、実習では双方向型のアクティブラーニングを取り入れることで、学生の自主性と独自性を引き出すことを心がけています。昨今の厳しい本邦の医療・医学を取り巻く環境だからこそ、次世代には「希望」を与え、医学教育という形で彼らの未来にできる限りの投資を行いたいと思っています。

その一環として、学生の自主勉強会を支援し、医学・生理学クイズ日本大会（Physiology Quiz in Japan：PQJ）への挑戦を支援・サポートしています（**図1、2**）。対象は、生理学講座細胞生理学分野のMD. PhDコース履修生および学生自主ゼミや心電図勉強会に参加している学生たちです。これらの大会は全て英語で行われ、世界中の医学生が生理学をはじめとする基礎医学の知識をクイズ形式で競い、交流を深めるというイベントです。学生たちは、大会に向けて英語での学習、仲間と協力・切磋琢磨して知識を高め合うことを経験すると同時に、大会を通して「国際的な視野」と「世界と日本の医学生の違い」を経験します。医学生のうちからの経験、国際交流は、知識を深めるだけでなく、今後のキャリアにとって大きな意義があるものと確信しています。さらに教員である私自身にとっても、海外、特にアジアの医学生たちのレベルの高さには大きな刺激を受け、教育・研究活動の改善への強い動機づけとなっています。なお、これらの活動を評価いただき、2025年7月には日本生理学会からの推薦を受け、学生たちと第21回の国際医学生生理学クイズ大会（Inter-Medical School Physiology Quiz：IMSPQ）にタイ・バンコクにて現地で参戦してきました（**図3、4**）。アジアを中心に欧豪を含む世界計72か国のチームが参加した大きな国際大会でした。学生たちは英語での活発なディスカッションに刺激を受け、終了後には海外チームと自主的に交流を行っていました。この経験が次大会に向けた強いモチベーションとなり、学習意欲をさらに高める契機となったと感じています。今後も、学生たちのアクティブラーニングを後押しし、国際的な挑戦を積極的にサポートすることで、彼らの未来につながる教育活動を展開していきたいと考えています。

【時を経て深まる諸先輩の教え～声かけや雑談・閑話を活かした教育の試み】

医学・生理学クイズ日本大会での引率経験を通じ、学生の教育・支援をする中で「学生と共に向上する」という視点を得ることができました。私はこれまで体系的な医学教育を受けてきたわけではなく、臨床・基礎の両分野で多くの諸先輩方からいただいたご指導が、私の教育観・研究者・臨床家としての礎となっています。ただ、当時の私自身の無知や未熟さゆえに、指導の真意を理解できなかったことも少なくありません。振り返るたびその重要性をあとから痛感し、先輩方には無礼やご迷惑をおかけしてきたことを反省しています。こうした経験を糧とし、今は学生一人ひとりの到達度そして個性を見極めること、双方向コミュニケーションを強化することを意識しています。ときには何気ない言動が学生の学びを大きく動かすこともあり、教育の本質はちょっとした声かけや雑談・閑話の中にこそあるのかもしれないと感じています。実際に、医学生クイズ大会で海外の学生と接する際に、彼らおよびその

引率教員は本当によく話し合い、コミュニケーションを密にとっていることが印象的でした。「最良の医学教育とは何か」、「自分に何ができるのか」を自問し続けながら、これまで諸先輩方から学んだことを次の世代へ引き継ぎ、自らの成長・向上とともに、世界のどこでも活躍できる医師・研究者の育成を目指しています。

【まとめと今後の展望】

激動の時代だからこそ、どの時代でも生き残れる・問題を解決できる人材育成に注力すべきであると思っています。基礎と臨床、国内と国外、様々な研究領域や診療科、異なる背景をもつ同僚や患者への思いやりなど、広い視野を持った医療人の育成に労を惜しまず邁進し、大学人としての責任を果たしていく所存です。

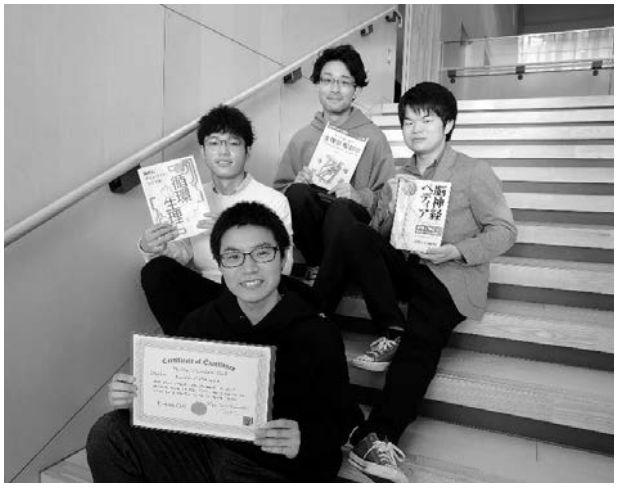

写真１：PQJ2022で入賞を勝ち取った学生グループ
（前：工藤大樹さん、左：前田一さん、後方：竹村壮太朗さん、右：平吹俊さん）

写真２：PQJ2025で入賞を勝ち取った学生グループ
（左から：小島一朗さん、島津大和さん、井上結翔さん、佐藤（筆者））

写真３：日本生理学会から推薦され第21回IMSPQに現地参戦した学生グループ
（左から：小島一朗さん、駒林佑海さん、井上結翔さん、佐藤（筆者））

写真４：第21回IMSPQの閉会式の様子